



豎穴住居内で内壁の補強に使う土を集める参加者

豎穴住居造り縄文人気分

茅野 藤森照信さんのWSで作業

茅野市出身の建築家、藤森照信さんが手掛ける樹皮ぶき豎穴住居を造るワークショップは2日、土壁の骨組みを整え、内壁の補強を行ったほか、床に敷く樹皮の敷物などを作った。約20人が参加し、2グループに分かれて作業を進めた。24日には完成を祝う会を予定しており、主催するちの観光まちづくり推進機構(DMO)によると、作業は順調に進んでいるという。

縄文人にならない、可能な限り自然から採った材料を使っ

て豎穴住居を造る企画で、9月14日に始まった。屋根はカヤではなく防水性の高いシラカバなどの樹皮を使う。材料

となる木や骨組み作りでロープの代わりとなるフジツルは自然の中から採取した。これまで延べ約150人が作業

に関わっている。

2日は藤森さんも現場を訪れ、進展状況を確認し、参加者と一緒に作業した。住居周辺では竹を縦に割って編み、土壁の下地とする竹小舞の製作準備や、樹皮壁と土の壁面の間に来た隙間に土を入れて埋める作業などを行っていた。あいにくの雨で土もぬかるみ、作業コンディションは

良好とは言えなかったが、参加者は笑顔で作業に打ち込んでいた。

辰野町から参加した御子柴努さん(52)は「豎穴住居を建てることに携わるなんて当然ながら初めての経験。木に触れ、土をいじる作業は新鮮で心が洗われる思い」と話した。ワークショップは3、4、16日にも行う。(野村知秀)